資料

日本中世における女性と仏教―唱導の言説とその評価をめぐって―

牧野淳司

澄憲『法華経釈』提婆品釈のうち、「文殊通経龍女作仏」の本文（暫定版）。

※本文は『花文集』（『真福寺善本叢刊　法華経古注釈集』臨川書店、二〇〇〇年の翻刻を参照）による。金沢文庫保管の伊勢房本『法華経釈』（大島薫氏の論文の翻刻を参照）により校訂。私意で段落に分ける。釈文は両本の訓点を参考に私に書き下す。

1 次、文殊通経龍女作仏者、為一大事因縁三周正説事已終、大聖文殊趣海中、流通妙経、教化衆生給。然、「極厭非悪趣、極欣非上二、唯欲界人天、仏出世現感」云（私云顕揚論文也）、三悪道、罪重根鈍処、極悪不善境也。実、従非大聖文殊利生方便如来在世流通妙益者、海中衆生、争見仏聞法、開悟得脱哉。故、平等一子慈悲、深徹八万由旬底、普賢三昧利益、普及三百万里城。凡、内海外海、尽無非済度砌。

2 所以、蓬莱方丈外仙棲、崑崙瀛州延齢砌、服不死薬、徒招千秋遐齢、噉長生方、虚遊万年寿域。増寿変易事、敢無出離生死思。海漫々直下見下無底、雲波煙波、最心細処也。乃至、我朝有吹上浜・和歌浦云処。天下無双地、日域奇異処也。蒼波路遠雲懸千里。往還客見之養眼、遊宴輩聞之動心。所以、海茫々至雲路境、風皎々催波動静。青羅懸巖肩、嘲唐画屏風、白雲廻山腰、嫉広隆山水。依之、作文家鳴硯、費二四不同句心、風月輩染筆、詠三十一字和哥。此等海際皆、如来在世往、一乗流通当初、大聖文殊・于填大王、一善巧方便心、同済度有情思、張八教網、下生死海、済龍畜輩、置菩提岸給処也。

3 然、「我等海中」語、雖亘権実半満、「唯常宣説」文、暫志海化本意。上万里蒼海帆、調本声聞人機、指千重波浪棹、誘菩提サタノ行給。

1 次に、「文殊通経龍女作仏」とは、一大事の因縁たる三周の正説の事已に終へて、大聖文殊海中に趣きて、妙経を流通し、衆生を教化し給ひき。然るに、「極厭非悪趣、極欣非上二、唯欲界人天、仏出世現感」と云ひて（私に云はく顕揚論の文なり）、三悪道は、罪重根鈍の処、極悪不善の境なり。実に、大聖文殊の利生方便・如来在世の流通妙益に非ざるよりは、海中の衆生、争でか見仏聞法し、開悟得脱せむや。故に、平等一子の慈悲は、深く八万由旬の底に徹り、普賢三昧の利益は、普く三百万里の城に及べり。凡そ、内海外海、尽く済度の砌に非ざるは無し。

2 所以に、蓬莱方丈は外仙の棲、崑崙瀛州は延齢の砌、不死の薬を服して、徒に千秋の遐齢を招き、長生の方を噉ひて、虚く万年の寿域に遊ぶ。増寿変易をのみ事として、敢て出離生死の思無し。海漫々として直下に見下せば底も無く、雲波煙波、最も心細き処なり。乃至、我朝には吹上の浜・和歌の浦と云ふ処有り。天下無双の地、日域奇異の処なり。蒼波路遠くして雲千里に懸る。往還の客之を見て眼を養ひ、遊宴の輩之を聞きて心を動かす。所以に、海茫々として雲路の境に至り、風皎々として波の動静を催す。青羅巖の肩に懸けて、唐画の屏風を嘲り、白雲山の腰を廻りて、広隆が山水を嫉む。之に依りて、作文の家は硯を鳴して、二四不同の句に心を費やし、風月の輩は筆を染めて、三十一字の和哥を詠ず。此等の海際は皆、如来在世の往へ、一乗流通の当初、大聖文殊・于填大王、善巧方便の心を一にして、済度有情の思を同じくし、八教の網を張りて、生死の海に下し、龍畜の輩を済ひて、菩提の岸に置き給ふ処なり。

3 然るに、「我等海中」の語は、権実半満に亘ると雖も、「唯常宣説」の文は、暫く海化の本意を志す。万里の蒼海に帆を上て、本声聞人の機を調へ、千重の波浪に棹を指て、菩提サタの行を誘へ給ふ。

4 而間、始沙竭龍王娘年八歳少女、円順信解薫内、聞経功徳顕外。海化衆会、其数幾。所以、龍女乗浮前習方便舩筏、務鵞王御前歩着、文殊取集権門善巧颯帆、喜鵞嶺陸地導得。凡、霊亀龍畜動足、螺貝魚鼈振鱗、蛤ワレカラモモシヲニスカリ、摩竭大魚凌高波、勇進一実都、励詣三変浄土。

5 時、大聖文殊、引率海中若干衆生、座千葉蓮花、如ウスマキ涌、霊山会上已詣給。海化衆生初見霊山儀式、入田夫王城、如臨野客都。

6 所以、三変浄土延瑠璃、黄金樹交枝、七宝塔婆尽荘厳、玉幡蓋靡風。樹下十方分身、組雑卅二相坐、塔中二仏尊像、綺八十種好居。

7 其時、多宝如来一生補処御弟子宝浄世界当来儲君智積菩薩、承釈尊教勅、奉問大聖文殊給様、「仁往龍宮、所化衆生、其数幾何。」

8 時、文殊無何心答給様、「其数無量、不可勝計。非口所宣、非心所測」。乃至、「有。沙竭龍王女、年始八才、知恵利根、善知衆生、諸根行業、得陀羅尼、弁才無碍、慈念衆生、猶如赤子。功徳具足、慈悲仁譲。志意和雅、能至菩提」文。

9 時、智積菩薩聞之、大驚騒疑給様、「我見釈迦如来、於無量劫、難行苦行、積功累徳、求菩提道、未曽止息。観三千大千世界、乃至無有、如芥子許、非是菩薩、捨身命処。然後得菩提道。不信此女、於須臾頃、便成正覚」文。

10 爰、以五言偈、自讃我身内証功徳美妙由様、「深達罪福相、遍照於十方、微妙浄法身、具相卅二、乃至、又聞成菩提、唯仏当証知」文。

4 而る間、沙竭龍王の娘年八歳の少女を始めとして、円順の信解内に薫じ、聞経の功徳外に顕る。海化の衆会、其の数幾ばくぞ。所以に、龍女は前習方便の舩筏に乗り浮かんで、鵞王の御前に歩み着かんことを務ぎ、文殊は権門善巧の颯帆を取り集めて、鵞嶺の陸地に導き得ることを喜ぶ。凡そ、霊亀龍畜が足を動かし、螺貝魚鼈は鱗を振るひ、蛤ワレカラはモシヲにすがり、摩竭大魚は高波を凌ぎ、一実の都に勇み進み、三変の浄土へ詣でんことを励む。

5 時に、大聖文殊、海中の若干の衆生を引率して、千葉の蓮花に座し、ウスマキの涌くがごとく、霊山会上に已に詣で給へり。海化の衆生初めて霊山の儀式を見るに、田夫の王城に入り、野客の都に臨むがごとし。

6 所以に、三変の浄土は瑠璃を延べて、黄金の樹枝を交へ、七宝の塔婆は荘厳を尽くして、玉の幡蓋風に靡く。樹下の十方分身は、卅二相を組み雑ぜて坐し、塔中の二仏尊像は、八十種好を綺へて居せり。

7 其の時、多宝如来一生補処御弟子宝浄世界当来儲君智積菩薩、釈尊の教勅を承りて、大聖文殊に問ひ奉り給ふ様、「仁龍宮に往き、化する所の衆生、其の数幾何ぞ。」

8 時に、文殊何心も無く答へ給ふ様、「其数は無量にして、勝計すべからず。口の宣ぶる所に非ず、心の測る所に非ず」。乃至、「有り。沙竭龍王の女は、年始めて八才なり、知恵は利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、弁才は無碍にして、衆生を慈念すること、猶ほ赤子のごとし。功徳を具足して、慈悲仁譲あり。志意は和雅にして、能く菩提に至れり」文。

9 時に、智積菩薩之を聞きて、大に驚き騒ぎ疑ひ給ふ様、「我釈迦如来を見たてまつるに、無量劫に於て、難行し苦行し、功を積み徳を累ねて、菩提の道を求むること、未だ曽て止息したまはず。三千大千世界を観るに、乃至、芥子のごときばかりも、是れ菩薩の身命を捨てし処に非ざること有ること無し。然して後、菩提の道を得たまへり。此の女の須臾の頃に於て、便ち正覚を成ずることを信ぜざるなり」文。

10 爰に、五言の偈を以て、我身の内証の功徳の美たふ妙なる由を自讃する様は、「深く罪福の相を達して、遍く十方を照らしたまふ、微妙の浄き法身は、相を具せること卅二、乃至、又聞きて菩提を成ぜること、唯だ仏のみ当に証知したまふべし」文。

11 然間、智恵第一御弟子、身子声聞、聞龍女自讃、挙女人五障重難様、「一者不得作梵天王〇、五者仏身、云何女身即得成仏」云々。

12 時龍女、旁々被疑籠、捧父龍王付属宝珠、釈尊申様、「我速可成仏、世尊納受此珠給。我若実非成仏器者、以不納受、可知此事」云々。尓時、世尊納受云、納此珠給事已畢。

13 而間、変龍畜五障身、具分証三身功徳、往南方無垢世界、即ヤカテ乍其身成仏。所以、変成男子春花、開霊山会上梢、即往南方秋月、澄無垢世界空。爰、被仰沙竭龍王子昔、雖懐迦楼羅鳥恐、作無垢世界教主今、備鷲王自在徳。昔電舌吐黒雲於四域、今拭脣説妙法於四弁。往動尾汲蒼海於万里、今変身備相好於万徳。故、五障雲尽散耆山嵐、三従霞早離晴覚月光。

14 智積菩薩疑難、虚歴劫修行費心、身子声聞論談、徒半字権門叩義関。実、三世覚母善巧方便、一乗円経現成明証、四味兼対大小無説、三教果頭権実不明。故、智積菩薩難悪、宝浄世界不説御法。身子声聞疑理ナリ、兼単対帯イツカハ明。「文殊通経龍女作仏」、大略如此云々。

15 其取今経、品々内悉具体等、句々下通結妙名、何品何文トシテ、ヲロカナルハヲハシマサシトモ、其中今品殊美覚候也。為智恵深了知濃人、再生敗種説、顕本遠寿旨、実無止妙御法也。為愚痴蒙昧輩、此提婆品コヽロヘヤスウ耳近、イト実美貴御坐也。所以、五逆調達乍在那落底、忽預天王如来記莂、八才龍女不捨戒後イロクツヲ、速唱無垢世界成道。浄心信敬輩者、免三途悪難、不生疑惑者、生十方仏前云々。

11 然る間、智恵第一の御弟子、身子声聞、龍女が自讃を聞きて、女人の五障を挙げて重ねて難ずる様、「一は梵天王と作ることを得ず、〇五は仏身、云何んぞ女身、速かに成仏することを得ん」云々。

12 時に龍女、旁々に疑ひ籠められて、父龍王付属の宝珠を捧げて、釈尊に申す様、「我速に成仏すべくば、世尊此の珠を納受し給へ。我若し実に成仏の器に非ざれば、納受したまはざるを以て、此の事を知るべし」云々。時に、「世尊納受」と云ひて、此の珠を納め給ふ事已に畢ぬ。

13 而る間、龍畜五障の身を変じて、分証三身の功徳を具し、南方無垢世界に往きて、即ちヤカテ其の身ながら仏と成る。所以に、変成男子の春の花、霊山会上の梢に開き、即往南方の秋の月、無垢世界の空に澄む。爰に、沙竭龍王の子と仰がれし昔は、迦楼羅鳥の恐を懐くと雖も、無垢世界の教主と作る今は、鷲王自在の徳を備へり。昔は舌を電かして黒雲を四域に吐き、今は脣を拭ひて妙法を四弁に説く。往へは尾を動かして蒼海を万里に汲み、今は身を変じて相好を万徳に備ふ。故に、五障の雲は尽きて耆山の嵐に散じ、三従の霞は早く離れて覚月の光に晴る。

14 智積菩薩の疑難は、虚く歴劫の修行に心を費やし、身子声聞の論談は、徒に半字権門に義関を叩く。実に、三世覚母の善巧方便、一乗円経の現成明証なれば、四味兼対の大小には説くこと無く、三教果頭の権実には明らかならず。故に、智積菩薩の難ずるも悪からず、宝浄世界に説かざる御法なれば。身子声聞の疑ふも理なり、兼単対帯イツカハ明せる。「文殊通経龍女作仏」、大略此くのごとし云々。

15 其に取りて今経は、品々の内に悉く体等を具し、句々の下に通じて妙名を結び、何れの品何れの文トシテ、ヲロカナルハヲハシマサシトモ、其の中に今品は殊に美たう覚え候ふなり。智恵深了にして知濃やかなる人の為には、再生敗種の説、顕本遠寿の旨、実に止むこと無き妙なる御法なり。愚痴蒙昧の輩の為には、此の提婆品コヽロヘヤスウ耳近く、イト実に美たう貴く御坐すなり。所以に、五逆調達は那落の底に在りながら、忽ち天王如来の記莂に預かり、八才龍女は戒後のイロクツを捨てずして、速に無垢世界に成道を唱ふ。浄心信敬の輩は、三途の悪難を免れ、不生疑惑の者は、十方仏前に生ず云々。

藤原俊成『長秋詠藻』四六三

又、人のもとに一品経供養せし時、提婆品の心を

袖の上の玉の光のほどもなく南の空の月とすむらん

▼「玉」は龍女の所持する宝珠。

『月詣和歌集』一〇五二

賀茂重保が堂のうしろどに法門の歌を人人によませてゑにかき侍りけるに、提婆品の心をよめる

成全法師

たぐひなき玉に心のみがかれてくもらぬ空にすめる月かげ

▼賀茂重保と澄憲は親密な関係。重保の堂供養は澄憲が導師、表白を作成。

慈円『拾玉集』二四七八・二四七九

提婆品　竜女成仏

わたつみややがて南にさす光玉を受けしにかねて見えにき

▼仏が竜女の差し出した玉を納受したことに成仏が前もって見えていた。

玉ゆらに出ぬと見えし海の月のやがて南にさし昇るかな

▼「玉ゆらに」は、ほんのわずかな間に。異文「玉ゆへに」。

▼「海の月」は、海から現れた竜女の成仏した姿の比喩。

▼二首とも「やがて」。宝珠納受と月が照らすこと（成仏）の時間差は無し。

藤原定家『拾遺愚草』二九三九

報恩会、提婆品

わたつ海のそこのたまもにやどかりてみなみの空をてらす月かげ

▼月の光（八歳の竜女）は海の底の玉藻に宿って、南の空を照らしている。